

前は幼～高年時代の募集要項と、「運動会の思い出」を例文的に掲載しましたが、今後、区民の皆さんから投稿があれば紹介したいと思います。併せて編集者の思い出のあれこれも紹介したいと思います。よろしく。

「思い出② ～手伝い：風呂焚きにつわるエピソード～」

私は（編集者）昭和25年生まれですが、30年代の私のお手伝いを紹介したいと思います。毎日の手伝いとは、風呂焚きです。何年生からしていたかは定かではありませんが、3年生頃からでしょうか。小さいときの風呂は屋内にはありましたが、焚き口と風呂場の出入り口は母屋の外側にありました。それが屋内に全てを移設して、その頃から風呂焚きの手伝いをしていました。



風呂は、「五右衛門風呂」と言って鉄製の釜で中腰の格好で浴槽に浸かりました。足下が熱いので底板を沈めていました。給湯タイプと違って、お湯が冷めにくく体が温かいまま風呂から出られると言う利点がありました。釜は一人が入れる大きさで水も少なく済みました。焚き付けには枯れた杉葉をよく使いました。薪としては、桑の木（養蚕で蚕の餌として1m程度の桑の木を刈り取って与えていました。それを乾燥させて薪にしていた）。他には、竹、雑木、自家製のワル木（薪のこと）等です。冬場の大きな仕事の一つは薪の確保でした。毎日の炊事・風呂焚き用の燃料を山から切り出しては適当な大きさに揃えてこなし（雑木の枝を鉋で切り揃えて藁や葛で結束）たり、薪割り（斧やヨキで割る）をして屋内外に保管しておきました。



風呂が炊き上がるまで火を絶やさないように、ずっと焚き口に座りながら薪をたしていきます。1時間ほどかかったのだと思います。ゆったりとした時間のなかで読書や宿題もしました。焚いた跡の消し炭は冬場なら「ばんこ」（あんかの役目）や「火鉢」に使い、余ったら「火消し壺」で保管していました。

村内では川の水を汲んで風呂水にしたり、隣近所で「もらい風呂」もされていたような記憶があります。

また春先になると、家族のみんなが風呂に入った後は、ぬるくなったお湯に「種もみ」を何日か浸けて発芽させて、田んぼの苗代に蒔いて稲の苗作りをしていました。



環境にやさしい暮らしの中で、身の周りの全てを無駄なく活用し、自然と共生し感謝を忘れない。不便が工夫や知恵を生み、ゆったりとした時間の流れの中で家族が役割分担し思いやる。「こんな古き良き時代は遠くなりにはけり」

